筆山

第60号／2016年7月
土佐中・高等学校同窓会　関東支部会報
編集人／ 中平　公美子（59回）
発行人／ 関東支部幹事長　市川　直介（53回）
関東支部ホームページ：http://www.tosako-kanto.org/



「右文尚武」の理想を求めて

楠目　博之（五一回）

三月二十日甲子園球場で誇らしげに入場行進する子どもたちの姿を見て、「よくぞこの場所にもう一度帰ってくることができた」という感慨深い気持ちになり思わず涙がこぼれました。昨年四月、十八年ぶりに野球部の現場復帰を許された私は、山本芳夫校長先生や寺尾郁夫野球部ＯＢ会長をはじめ多くの方々のご協力を得て、西内一人監督とともに恩師である籠尾良雄先生が土佐高校野球部に託された「右文尚武の理想　ひたぶる全力疾走　純白の土佐とわに輝け」の実現を目指し、取り組みました。「砂に水がしみ込むよう」という例えのごとく、子どもたちは我々の指導に全力を傾けて応えてくれ、チームもめきめきと力をつけていきました。昨夏の選手権大会県予選は久しぶりに準決勝まで駒を進め、迎えた昨秋の四国大会県予選では高知県第三代表の座を勝ち取り四国大会に出場しました。一回戦では城南高校（徳島県）を、二回戦では小豆島高校（香川県）をそれぞれ一点差で破り、あと一つ勝てば甲子園というところまで勝ち進みました。その準決勝戦では同じ高知県代表の明徳義塾高校と再度対戦し、近年では最高の試合内容でしたが三対四で敗れました。しかしその戦いぶりが評価され、三年ぶり八回目の選抜甲子園出場を勝ち取ることができました。三月二十三日の試合は近畿大会優勝の大阪桐蔭高校と対戦し、ご承知の通り残念な結果に終わってしまいました。アルプス席を埋めていただいた多くの在校生や保護者、卒業生の応援に応えることができず、申し訳ない気持ちでいっぱいです。しかし、今回の甲子園出場で得た貴重な経験を糧に、「甲子園で勝って校歌を歌う」という宿題を成し遂げるべくこれからも鋭意努力を重ねてまいります。今後とも母校野球部に対します倍旧のご支援ご声援をお願い申し上げます。

関東支部同窓会 2016. 6. 4



＜関東支部同窓会　概要＞
開催場所：霞が関ビル３５階
東海大学校友会館
開催日　：２０１６年６月４日（土）
式次第
関東支部総会
１．開会挨拶
２．支部活動報告
３．役員改選報告
４．会計報告
５．監査報告
６．校長挨拶・学事報告
７．はちきん会のご案内
８．学生・若手社会人交流会のご案内
９．筆山会のご案内
記念講演Ⅰ：西亮一氏（５６回）
新潟大学理学部准教授　宇宙物理学者
記念講演Ⅱ：藤田徹也氏（５１回）
ＴＢＳ代表取締役専務取締役
懇親会
１．開会宣言
２．来賓紹介
３．挨拶
４．乾杯
５．歌とピアノ演奏
（７６回生　奥田純子さん）
６．９１回生紹介
７．センバツ出場！熱闘の軌跡
８．よさこいチーム「陽」ご紹介
９．引き継ぎ
１０．校歌・エール
１１．閉会の挨拶



総会準備会
他にはない同窓会
小松健造（五六回）

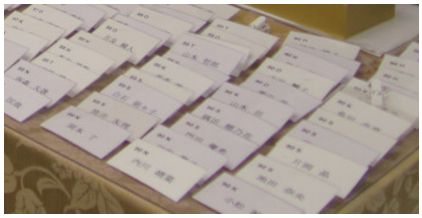
これほど多くの方々の時間と努力に支えられて開催される関東支部同窓会とは、一体何なのだろう?卒業回末尾六の三六～八六回生の有志幹事の一員として準備活動する中、そんな思いが浮かびました。

今年の総会では山本校長先生から学事報告に加え、土佐の同窓生が二万人を超えたというお話がありました。続いて、西亮一さん（五六回）の「新世代天文衛星が解き明かす天の川銀河の謎」と藤田徹也さん（五一回）の「テレビ!?　わたしとテレビの三六年をちょっとお話します」というお二人の素晴らしい講演を皆様、興味深くお聞きしていました。

懇親会には、今年卒業された九一回生（二三名）、また同窓生のご家族の方を含め、約三百名の参加がありました。ご来賓の紹介、岩城孝章高知県副知事（四六回）のご挨拶に続き、森郁夫支部長（四一回）の乾杯により宴が始まりました。

中盤では、シンガーソングライター樹奈こと奥田純子さん（七六回）のピアノ弾き語りで盛り上がりました。懐かしい歴代やぐらのスライドやセンバツ出場の映像がダブルスクリーンに映し出され、最後は全員で肩を組んで校歌の大合唱、エールをもって大盛況のまま閉会を迎えました。六の有志幹事全員が幅広い世代の方に楽しんで頂ける同窓会をテーマに考えた企画準備が報われたものと思います。

八十歳代の大先輩から今年の卒業生まで何百人も集まる高校の同窓会なんて聞いた事がないと、よく友人・知人から聞きます。最近、足が遠のいている皆様もぜひ会場にいらっしゃって同窓の絆を感じてみませんか。こんな同窓会は土佐以外、他にはないと思うのです！





関東支部総会講演に寄せて

西　亮一（五六回）

この度は関東支部同窓会での講演の機会をいただき大変光栄に存じます。ありがとうございました。自分の研究分野に関連して、「新世代天文衛星が解き明かす天の川銀河の謎」という題で講演しました。日常とかけ離れた世界の話ですが、たまにはこういう「天文学的」な話で気分転換するのもよいのではないかと、手前味噌ながら考えて話させていただきました。

私は子供のころから，宇宙や天文学に興味は持っていたのですが、土佐中高時代にそれを目指して勉強に励んでいたかと言えば全くそうではなく、ひたすら部活（バドミントン部）に明け暮れていました。部のレベルが高かったこともあり（インハイにも出場しました）、とにかくきつい練習の日々でしたが（今回、昔の仲間と話していても「バド部はよう走りよったき」と何人もから言われました）、高三の夏までやりきることができたことは、後々の大きな財産になったと思います。

今回、同窓会に参加して特に感じたのはＴＢＳの藤田さんはもちろん，土佐の卒業生が非常に幅広い分野で活躍していることです。これからも土佐校の発展そして卒業生のさらなる活躍を願っています。



総会ダブル講演

濱田知佐（五六回）

今年の六の回の総会での講演は同窓会史上初の「ダブル講演」でした。実は「下町ロケット」がヒントになり、「ロケット」と「ＴＢＳ」が結びつき、お二人にお願いすることになったのです。まずは、五六回西亮一氏（京都大学卒→新潟大学自然科学研究科と物理部物理学科両方の准教授）による「新世代天文衛星が解き明かす天の川銀河の謎」。約六万光年以上あると推測されている天の川銀河は、まだまだ謎が多く、その謎を解き明かすために欧州の天文衛星「Ｇａｉａ（ガイヤ）」と日本の天文衛星「ジャスミン」が共同で国際研究するプロジェクトが進んでいて、二〇二二年頃には天の川銀河の本当の姿を知ることができるということ。天の川銀河の写真や星の距離の測り方などを説明して下さりながら、非日常の広大な宇宙の世界へいざなってくれました。空を見るべく顔を上げ、毎日の小さい悩みが吹き飛ぶようでした。そして、次は五一回藤田徹也氏（上智大学卒→ＴＢＳ代表取締役常務取締役）による「テレビ!?わたしとテレビの三六年をちょっとお話します」。カメラマンとしてＴＢＳに入社し、「ザ・ベストテン」では、カメラの上にアライグマ「ラスカル」のぬいぐるみを付けて、緊張していた初出場の浅香唯さんの笑顔を引き出したこと、トレンディードラマでは俳優さんの演技に見とれてしまい撮影し忘れたこと、新世界紀行の中国桃源郷の撮影で数カ月現地に滞在して、現地の方の目線で撮影ができたこと、また趣味マラソンのことなどをお話下さいました。そしてＴＢＳアナウンサーの八五回の品田亮太さんも加わり、「この日本語正しいですか?」というクイズのコーナーに突入。土佐高校卒業生の日本語力を確認されました。最後に籠尾先生の「全力疾走三十年」の本から、「右文尚武の理想ひたぶる全力疾走純白の土佐とわに輝け」という文章をお読みになり、「皆さん、土佐高校と共にとわに輝きましょう。」と締めくくられました。この春、甲子園に連れて行ってくれた後輩たちを誇らしく思いながら、自分も襟を正し胸を張りました。



◆土佐中・高等学校同窓会関東支部新役員

支部長　森　郁夫（四一回生）留任
幹事長　市川　直介（五三回生）留任
事務局長　二宮　潔（四九回生）留任
副幹事長　前田　憲一（三七回生）新任・筆山会連携
　黄川久美子（四七回生）留任・はちきん会
　澤田　和英（五三回生）留任
　濱田　知佐（五六回生）留任・はちきん会
　宮崎　晶子（六七回生）留任・はちきん会
　島本　陽子（七五回生）新任・はちきん会
　加藤　丈典（七六回生）留任・若手の会
　澤田　千紘（七八回生）留任・若手の会
　中平　彩夏（八五回生）新任・はちきん会
会計監査　幸徳　正夫（三七回生）留任
　森木　隆裕（五九回生）留任
会計　北村　悠夏（八三回生）留任・はちきん会

◆常任幹事

名簿委員長　深田　晋平（七三回生）留任
筆山編集長　中平公美子（五九回生）留任・はちきん会
HP編集長　筒井　康賢（四一回生）留任
総会世話役　西森　さと（五七回生）留任・はちきん会
顧問　曽和　純一（十六回生）留任
　宮地　貫一（二二回生）留任
　浅井　伴泰（三十回生）留任
　溝渕　真清（三二回生）留任
　佐々木泰子（三三回生）留任・はちきん会
　岩村　康生（四一回生）留任
　鶴和　千秋（四一回生）留任
　川上　司　（五二回生）新任
退任　大石　和夫（四十回生）
　川上　正衡（五八回生）

関東支部総会　写真集


2016/06/04


2016/06/04




2016/06/04


2016/06/04


高等学校同窓会関東支部総会
2016/06/04


2016/06/







本部便り

同窓会本部　幹事長
西山　彰一（四八回）

五月のゴールデンウイークと共に初夏の陽気となった土佐路に多くのお客様を迎え、まちが大変賑わっております。日頃より同窓会活動にご理解とご協力をいただいております事を心から感謝申し上げます。

現在、本部におきましては、八月十三日に開催予定の同窓会総会とホームカミングデーの準備を行っております。今年で十一回目を迎えるホームカミングデーは「六の会」を中心に実行委員会を編成し、幅広い年齢層の同窓生が懐かしい高校生の想い出を語り合いながら、これからの母校の発展に寄与すべく様々な事業が企画されております。恒例となった、母校の最上階の景観の素晴らしい筆山ホールでの講演は、待望の永野元玄さん（二九回）にお願いいたしました。同窓会総会においては二〇一五年度の事業の報告と二〇一六年度の事業計画、並びに役員の改選が予定されております。

総会に先駆けて、八月八日から十一日までよさこい祭りが開催されます。大学一年・二年生の同窓生が活躍する踊り子隊「よさこい陽」も今年で十一回目の参加となります。多くの同窓生のご寄付や暖かいご支援によって卒業後の夏の楽しい交流の場として成長しております。

今年の夏も是非、高知の様々な行事をお楽しみいただきたく、ご挨拶とお知らせとさせていただきます。

関東支部便り

■総会のご報告

六月四日（土）霞ヶ関ビル三五階東海大学交友会館にて、ご招待の新卒九一回生を含む、二八五名の参加で盛大に開催された。

総会では、活動報告と役員改選について審議された。（新役員紹介は三ページ）基調講演では、西亮一さん（五六回）のお話から未知なる銀河に夢を抱き、藤田徹也さん（五一回）のお話でテレビ制作の現場を垣間見ることが出来た。

■懇親会

今年準備担当した六の会有志の企画で、会場内が奥田純子さん（七六回）の爽やかな声とピアノの音に包まれる中、土佐弁が飛び交い、制服を着て土佐高生気分で記念写真を撮るなど、笑顔いっぱいで大いに盛り上がった。末尾が同じ回生の集まりの各テーブルは、学年を超えた十歳違いごとの交流が定着、お互いに近況報告をして一年ぶりの再会を楽しんだ。

筆山編集長　中平　公美子

母　校　便　り

学校長 山本　芳夫　（４０回生）

同窓会関東支部の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。また、平素は母校に対し格別のご支援とご厚情を賜り感謝申し上げます。それでは以下、学校の近況についてご報告致します。

○高校野球センバツ出場について（御礼）

平日の第一試合という日程にも拘わらず、全国各地から多くの同窓生が甲子園球場まで応援に駆け付けて下さいました。中でも、関東支部から多数の皆様にお運びいただき有難うございました。また、TV観戦などでご声援いただいた方々にも感謝申し上げます。試合内容と結果はご承知のことと存じますが、選手達は強豪相手に懸命なプレーを見せてくれました。反省すべき点もございますが、大舞台を踏むことが出来た彼等は今回の経験を糧に次の目標を目指し練習に励んでおります。引き続き応援をよろしくお願い致します。加えて、募金にも本当に多くの方々にご協力をいただき有難うございました。返す返す、多くの人々に支えられた甲子園出場であったと感謝申し上げます。

○大学入試結果について

九一回生となる前年度卒業生二九二名は、多くの思い出を胸に学び舎を巣立って行きました。そして、それぞれの志望大学の入試に果敢にチャレンジしました。

今年の大学入試の総括は次表の通りですが、前年度実績と比較すると、現役生は、合格率と国公立や難関大学の合格者数においてほぼ同水準を保った上で、国公立医学部医学科の合格者数が増加しました。一方、既卒生は、難関十大学の合格者数では例年を若干下回りましたが、国公立医学部医学科の合格者は増加しました。その結果、現役生と合算した国公立医学部医学科合格者は三八名を数え大きな足跡を残すことができました。

尚、主要大学合格者数につきましては学校のＨＰ「進路の部屋」欄に掲載してありますのでご覧下さい。

○新年度スタート、そして、高校県体など各種大会について

新年度・新学期がスタートしましたが、新入生（高校は土佐中以外からの入学者四八名を含む三〇四、中学は二五一名）も新しい学校生活に慣れてきたところです。中でも、初々しい中学一年生を迎え、例年の事ながら学校全体が華やいだ雰囲気に包まれております。そして、スポーツシーズン到来とともに様々な大会が予定されております。五月下旬開催の高校県体には、六月開催の水泳を含め、十七種目に三三九名（男子二三四名、女子一〇五名）がエントリーしており、四国大会やインターハイ（七月下旬から岡山県を中心に六県で開催の「情熱疾走中国総体」）出場権獲得を目指した挑戦が始まります。また、高校野球は七月中旬から「夏の甲子園」に向けての県大会も行われます。一方、中学は六月下旬から高知地区体が始り、県体、全国大会へと日程が組まれております。

これらの大会への果敢なチャレンジを通し、「より高いレベルでの文武両道の達成」を目指してまいります。

○修学旅行について

今年も高一生の東京・京都の修学旅行（十一月二十一日から四泊五日）を予定しております。その中で特に、首都圏でのコース別研修（十一月二二日予定）は生徒にとって今後の進路を考える上での貴重な実体験となっております。本研修実施に際してはいつも関東支部の同窓生の皆さんに色々お世話になり感謝しております。今回もどうか宜しくお願い申し上げます。

ご報告は以上ですが、暑い季節を迎える中、皆々様のご自愛とご健勝を心から祈念申し上げます。

年度	２８年度	前年度
現役合格率	６９．２％	７０．５％
国公立 現役合格者	１１８名	１１８名
難関１０大学＊	４１名 （現２９名）	４２名 （現３０名）
国公立・医学部 ＜医学科＞	３８名 （現１４名）	３１名 （現１１名）

＊旧帝大、一橋、東京工、神戸

・本年度　東大４名（現３名）
　　京大３名（現３名）

母校
同窓会本部
関東支部

土佐中学・高等学校　事務局　千頭裕　〒780-8014　高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL)088-833-4394 (FAX)088-833-7373 (E-mail)tosa@tosa.ed.jp (HP)http://www.tosa.ed.jp/index.html
土佐中学・高等学校同窓会本部　会計幹事　千頭裕　〒780-8014　高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL)088-833-4394 (FAX)088-833-7373 (E-mail)tosa@tosa.ed.jp (HP)http://www.tosaobog.com/
関東支部　事務局長　二宮潔　〒100-8222千代田区丸の内2－6－1丸の内パークビルディング
森・濱田松本法律事務所　弁護士市川直介気付
(TEL)03-5223-7719 (FAX)03-5223-7619 (E-mail)naosuke.ichikawa@mhmjapan.com
(HP)http://www.tosako-kanto.org/

筆山会ゴルフコンペ

第70回コンペは風薫る5月12日、神奈川県西部中井町のレインボーCCにて、森健氏（23回）から久松氏（50回）までが参加して、同窓会ならではの和気藹々とコンペを楽しみました。
レインボーCCは、長く筆山会会長をされた北岡龍海氏のホーム。筆山会としては懐かしい思い出のコースをたどると、そこここに改良がされていました。セカンドからの多くは、打ち上げの砲台グリーンと難しさは変わらず、ほとんどの方がいつもより多く叩いていました。優勝は久松氏で、グロス89、ネット72。2位・竹田氏（33回）、3位・田中氏（37回）でした。
次回は10月13日開催。場所は検討中。
参加希望とコース推薦は、事務局小松三男（41回）までお寄せください。
TEL：090−5561−7023　　e−mail：a09055617023@docomo.ne.jp

第19回 はちきん会のご案内

平成28年10月15日(土)
受付11:30から 開宴12:00から15:00
場所【銀座アスター お茶の水寮館】
会費：女性5,000円 男性9,000円
学生3,000円

今回のゲストスピカーは、土佐校初代女子学生の青嶋武子さん(28回生)です。
東京女子医大ご卒業後、産婦人科を開業されご活躍されてきました。
ナイトは、片岡方和氏(40回生)です。
(株式会社ちふれ化粧品代表取締役社長)
新お茶の水ビルの21階からの眺望と老舗の中華料理を楽しみましょう。
詳細とお申し込みは土佐校関東支部HPから
http://www.tosako-kanto.org/

37回と38回幹事団の手作り企画・催行

第20回土佐ハイクの会のご案内

９月10日（土）
11日（日）
貸切バスでの１泊２日
参加費　27,000円（予定）

ご友人
ご家族も
大歓迎！

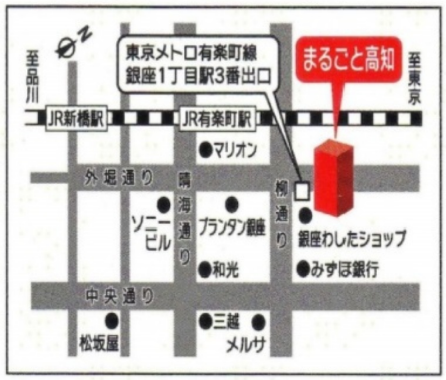
１日目　7:15　新宿集合
国宝松本城
上高地散策
平湯温泉泊
２日目　乗鞍岳
登山組と散策組
温泉で一息
20:00　新宿解散

お問い合わせ先
馬田　宏（37回）
090-2905-1857
u_mahiro@jcom.home.ne.jp

是非、ご参加ください♪

おきゃく
TOSA DINING

一般財団法人
高知県地産外商公社
プロデューサー
濱田知佐（56回生）
アルバイト
山崎 沙央理（83回生）
黍原　健（87回生）
下田　優（87回生）
高木 菜水（88回生）
清岡 玲布（88回生）
渡邉 真子（88回生）
高田本 裕斗（89回生）
立竹内 侑理（89回生）
竹内 駿（90回生）
田内原 薫子（90回生）
人原 海里（90回生）
今橋 香乃（90回生）
筒井 千夏（91回生）



www.marugotokochi.com/
Tel 03-3538-4351（サンゴ・皿鉢・ヨサコイ）
〒104-0061 東京都中央区銀座1−3−13

ロッテ・ガーナよさこい連 助っ人歓迎

原宿スーパーよさこい演舞は8月28日正午から。第13回ガーナ高校生日本研修旅行の来日は8月19日。高知を訪問、土佐校と交流します。
委細は関東支部HPで追報予定。
両国高校生との対面を心待ちにしているひとりが、熱帯風土病薬の発明で昨年ノーベル賞に輝いた大村智博士。25日、埼玉の北里メディカルセンターにて対話会を行います。在任中奇偶に浴した浅井和子元ガーナ大使（35回）の斡旋です。



ガーナよさこい支援会 公文敏雄
kumont2@yahoo.co.jp

第八八回選抜高校野球　出場記念特集

二〇一六年三月二三日（水）　大阪桐蔭　対　土佐

「土佐野球部」栄光の軌跡



野球部は、これまでに春七回、夏四回甲子園出場している。

五二年春に初めて聖地の土を踏むと五三年には準優勝。純白のユニフォームが強豪校を撃破する姿に「優勝旗なき優勝校」と称された。六三年九月に籠尾監督が就任。「全力疾走」の徹底指導の下、六四年春四強、六六年春準優勝。土佐の野球は全国の高校野球ファンを魅了し続けている。

二一世紀枠で二十年ぶりに出場した三年前、母校愛がアルプススタンドを埋め尽くした。自力で手に入れた今年の選抜も勝敗以上の感動を与えてくれた。「右文尚武」の精神は健在。次回こそ勝利の校歌を歌おう。

【大会の花】と評価される土佐の野球を継承してきた伝説のヒーローの方々に『甲子園に思うこと』をお聞きした。

ライバル校の壁

島村　聖（四十回）



部員十四名での甲子園出場。二試合が逆転勝ち。準決勝に０対１の惜敗が成績。当時の県内ライバル校は、高知・安芸・市商に好投手（有藤・門谷・江本と後のプロ野球選手）が存在。『厚い壁』となりベスト四止まり。籠尾監督が就任直後の秋。県大会準決勝で高知（公式戦二三連勝中）に２対１の奇跡的逆転勝ち壁を突破したことは、チームの分岐点になりました。以後、『とんとん拍子』。決勝で安芸を倒して優勝。四国大会でも、監督に乗せられ三連勝で優勝。甲子園出場。「あっ」という間の三ヶ月。練習方法は「新鮮」。守備重視と全力疾走。実業団や四国強豪校との練習試合等。チームは確実に力をつけ自信を深める。この経験がセンバツでの接戦を制した。準決勝の敗戦は個人的には最高の投球が出来、悔いは無し。高校卒業から五十年余りの現在、地域で還暦・古希の草野球チームに所属し、全国大会を目指し白球を追っている。今回、良き伝統を守りセンバツ出場迄頑張った後輩達に『感謝』。

夢のメッカ甲子園

上岡　誠二（四二回）



県内二強チーム・高知商、高知高の壁は厚かったが、在学中五回あるチャンスに幸運にも一回甲子園に出場できました。部員十二名の大多数がチビッコでしたが、監督の籠尾先生が常日頃言っていたこと「守り抜き僅差で勝つのが土佐の野球だ」は、実行できたと思います。センバツとは名ばかりで前年秋の四国大会で二位以内になっていなければなりません。二位で県代表になった為、他県一位の強いチームに二回続けて勝たなければいけない苦しいゲームの連続でした。丸亀商、徳島商に勝ったのは夢のようです。忘れてならないのは二年の夏の関西遠征です。当時一流のチーム浪商、北陽高、和歌山桐蔭と対等にゲームが出来た事が大きな自信となりました。甲子園では二失策、全員が絶好調だったと思います。個人的には五試合三失点と大満足です。あれから五十年で同期は秋田君、橋本君と私、当時のチームメイトとしても八名だけとなり淋しい限りです。現役チームには伝統通りの「点は、取られても与えないチーム」を目指し、昨秋のような快進撃を期待します。

土佐高校の復活に賭ける思い

荻野　友康（四四回）

甲子園の開会式を見つめながら純白のユニフォームが堂々と行進していく様は格別であった。よくこのチームがこの晴れ舞台に出られたものだ。昨年八月に向陽グランドでの指導をスタートした段階では総合力では県の八強又はそれ以下のレベルにあった。投手力、打力、守備力、走力などどれをとっても光るものがない。これでは戦えない。甲子園ははるかかなたでどうしたものかと嘆いたものだった。甲子園は一年後の秋の予選で勝負できるようにするべし。寺尾野球部ＯＢ会長との議論の結果、今年は四国大会に出場することを目標としようと力弱く誓った。何度も話し合った結果、土佐高校の原点回帰。絶対的なエースを作り、最小得点で逃げ切ることができるチームを一年かけて作り上げることを確認し誓った。最大の課題は全国レベルのエースを作ること。守備面はミスをなくし長打を防ぐこと。攻撃面は四球など出塁率を上げること。四点打線を目指したいが人材不足で無理難題のため１点ずつの積み重ねしかない。チーム練習は守備の強化に大半を使う。特に内野に時間を割くこと。妥協なしで非情に徹するべし。以上を首脳陣と誓った。特に、楠目部長がこれに当たってくれたことと県予選の組合わせが時間的に余裕のある日程となっていたこと等が幸いし鍛えに鍛え少しずつ光が見えてきた。だが、県予選は予想通り苦戦の連続であったが何とか第三代表という目標はクリアしてしまった。尾崎投手は当初は背筋力が強くキレのある球を投げるがコントロール、変化球にむらがあり、課題はスタミナがない状況であった。そこで勝ち上がるためには三～四回をしのげる投手起用を計画したがうまく機能しなかった。勝ち上がる度に尾崎投手の存在感が増してきているのに驚き、ひょっとして待ち望んだ全国レベルのエースになるかもの予感を感じさせるように著しい成長を遂げてきた。四国大会ではエースが誕生したためチームに団結心が芽生え戦う集団と変身してしまっ



た。点を取られない安心感が原動力となり、それまでの不安が解消されポジティブな気持ちにチーム全体がなった。これがエース効果である。土佐高校の原点回帰があっという間に出来上がってしまった。こんなにもうまく、早くなるとは予想もしなかった展開となった。甲子園が呼ぶのは当然の結果であった。甲子園では大阪桐蔭高校に大敗したが、まだまだ発展途上のチームなのでもっともっと強くなってから甲子園に来いよというメッセージであったと思う。やっと待望の全国レベルのエースが出来た。尾崎投手は２年生でもあり残り三回チャンスがあり、運があればもう一～二回甲子園に出られるであろうという楽しみを与えてくれた。ＯＢとしては益々後輩を鍛え復活を現実にしたいと改めて誓った甲子園であった。

甲子園に思うこと

玉川　壽（五二回）

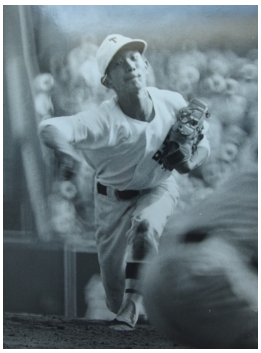
私は、かつて横浜のリトル・シニアチームを一年間ほど指導したことがある。総勢百人を超す、プロ野球選手をも輩出した名門チームだ。卒業生は、甲子園出場を夢みて、それぞれ地方の強豪校に進学する。彼等は、小さい頃から硬式球に馴れ親しみ、野球の基本技術を叩き込まれ、親たちは子供の夢を叶えるために全力でサポートする。甲子園に出場する強豪校は、小さい頃から英才教育を受けた彼等によって成り立っているといっても過言ではない。

土佐高は、ここ数年で二度の選抜出場の機会を得た。両大会とも、一回戦は大会屈指の強豪校との対戦となった。試合を見るかぎり、選手の球捌き、スピード、パワーともに残念ながらスコア以上の実力差があったと言わざるを得ない。甲子園で強豪校と互角に渡り合うために、しかも三年という短い期間でチームを仕上げるために、練習や環境に今以上の創意工夫が必要だろう。

思い出すのは、故籠尾先生の言葉である。（記者のインタビューの時だったか忘れたが）「文武両道を志す我々にとっての理想は、選手の睡眠時間が十分確保できないことです。しかし我々は、この檜舞台（甲子園）で強豪校に勝つことを決して諦めません。」…後輩諸君の健闘を祈る。

二師の恩義

片田　統途（五三回）



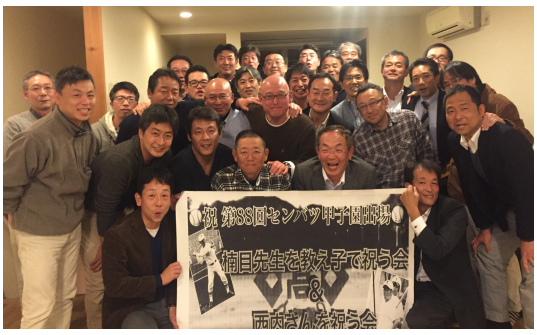
今日の私が生きる術を習得できたのも二人の恩師から得た共通の教え「事上磨錬」により、主に野球を通じて教えいただいたことです。実際、初めて甲子園に出場できたとき、あるいはマウンドに立ったとき特にその意を感じましたし、その後の何事に対しても乗り越えてこられたのも二人の師のおかげだと思っております。

その一人は父であり、幼い頃より日常生活を通じて生活態度、生活習慣など無言の教えにより体感を通じて鍛錬できたことは二五歳で野球をやめてから、現在に至るまで影響を受け続けています。そして籠尾先生には「勇気凛凛」を常に伝授していただき甲子園等でのピンチになった場面では特に冷静な判断をするような切磋を学び、「右文尚武」の精神を尊び、習練してきたことが今の自分を築いてこれたのだと思っています。

最後に二師に感謝しつつ、ぜひ後輩の皆様も自分以外からの教えを大事に今後の将来に繋げてほしいと思います。

土佐らしい勝利へ

森山　健一（六一回）



土佐中・高校野球部で一緒に汗を流した西内先輩と、十八年ぶりに野球部に復帰した楠目先生の二人三脚でつかんだ甲子園。私の高校時代、楠目先生にはコーチ・部長として叱咤激励頂いたが、期待に応えることができなかった。私にとって待ちに待った先生の現場復帰であり、嬉しさもひとしおであった。

二月下旬に、楠目先生にお世話になった世代の野球部ＯＢが帰高し、楠目先生の復帰と甲子園出場を祝し大いに盛り上がり、当時の厳しい練習が育んだ固い絆を改めて感じることができた。

甲子園での結果は残念であったが、今の土佐高野球部は以前とは異なり部員も多い。部員全員でベストを尽くすために、寮是にもある通り「右文尚武を志向し、真の友情を育み、自ら工夫し自発的に努力する」ことで、野球を心から楽しんでこそ一人ひとりが上達してより強いチームになると思う。土佐高生だからできる土佐高らしい野球で強豪校を倒すことを期待しています。

土佐への期待

岩﨑　匡宏（六六回）

二一世紀枠での出場以来、三年振りの甲子園。思ったよりも早く甲子園に帰ってきたな、というのが率直な感想だ。結果は大阪桐蔭に０－９の完敗。悔しいけれど、これが土佐高野球部の「現在地」である。

一方で、メディア報道や観客の反応などを見ると、土佐高野球部に求められているものは勝利ばかりでなく「全力疾走」に象徴される見ている者を惹きつけ感動させる『高校野球の神髄』のようなものだということをあらためて肌で感じる。

野球専門学校とも言うべき私立強豪校が隆盛を誇る昨今だが、近い将来、後輩たちが往年の「粘りと集中力」を発揮され、甲子園のアルプス席で青春を謳歌した皆と肩を組んで校歌を歌える日が来ることを願ってやまない。

センバツ甲子園　写真集













開会式を純白のシューズで

野球部ＯＢ　杵鳥史至（七二回）

前回（二一世紀枠での出場時）に引き続き、この「筆山」への執筆を依頼いただきましたので、簡単ですが、選手たちへの寄贈品についてご報告致します。

現役選手・監督・部長・コーチの皆様へ、少しでもお力になれたらと、野球部ＯＢより、以下、寄贈させていただきました。

開会式、入場行進の際に、ご着用いただく、トレーニングシューズです。

現在、私が一スポーツブランドに勤めている関係で、取り纏めました。（※寄贈に関しては、私の近い代より、連絡のとれる方々にて、行わせていただきましたので、ご了承ください。）

三月二十日、選抜高校野球大会の中国・四国地方代表・土佐高校が登場した時には、感動で身震いしましたが、その足元が真新しい「純白」のシューズにて支えられたことは、幸せに思います。

早いもので、もう二十年も前の話になりますが、私達の代は、最後の夏、高知大会明徳義塾高校との決勝戦、延長の末敗れ、甲子園への切符を手にできませんでした。

そこから、時間は経過しましたが、前回の二一世紀枠出場、今回の選抜出場にて、着実に前に進んでいると感じました。

強豪校相手に、尾崎投手の粘り強い投球、二回には柴田選手、松原選手の連打でスタジアムを盛り上げ、これ以上にない経験ですよね。あとは勝つのみ。

私事ですが、諸先輩方が甲子園にて、「全力疾走」で躍動する姿に憧れ、大阪出身でありながら、「土佐高野球部」への入部を決意しました。

そのように観戦している次の世代の子供達が「憧れる土佐高野球部」であるよう、さらなる飛躍を期待しております。

最後になりますが、きっとまた、近々、甲子園出場を決めてくれると思いますので、その際は、野球部ＯＢに関わらず、多くの皆様と土佐高談義できれば良いですね。



全国での一勝を目指して

土佐高等学校男子テニス部監督　沖　宗右

三月の第三八回全国選抜高校テニス大会出場に際しましては、たくさんのご支援、温かい応援をありがとうございました。心より御礼申し上げます。

昨年の五月、新チームがスタートした時の目標は「選抜出場」でした。予選はシングルス３、ダブルス２の計５本で行われる団体戦。生徒たちは目標を達成するために努力し、十月の県予選では高知高校との激闘を制し優勝しました。四国選抜枠は三校のみ。四国予選初戦の松山北高校（愛媛二位）には４－１で勝利しましたが、準決勝では松北高校（香川１位）に０－３で敗退。次の順位決定戦では英明高校（香川二位）に３－２で勝ち、三位決定戦まで漕ぎつけました。相手は何度も練習試合をしている愛媛一位の新田高校。結果は、シングルス１の高二中岡祐太の勝利のみ１－３で敗退でしたが、選手たちは、四国大会で二回勝てたことに練習の成果を感じているようでした。自力での出場は決められませんでしたが、二月の選考委員会で第１回大会以来となる三七年ぶりの出場が決定、全国での「土佐」の評価の高さを改めて感じました。

開会式では主将の白石廉太郎が選手宣誓を立派に務め、大変良い経験をさせていただきました。「全国での一勝」を臨みましたが、初戦で鹿児島の鳳凰高校に０－５で敗れました。それぞれが持てる力を振り絞り戦ったこと、応援の部員たちも含め、全国のレベルを肌で感じることができたことは必ず次につながると思います。

生徒たちと「全国での一勝」を目標に頑張ります。これからも応援よろしくお願いします。

三七年目のバトン

澤田　和英（五三回）

野球部に続き、テニス部も選抜大会出場が決まったと聞き、こじゃんと嬉しく思いました。三七年ぶり？俺ら以来か？と少々驚きましたが。五三回生の我々は強い先輩たちの背中を追い、六人が高三の夏まで部活を続けました。団体戦では高知高を破りインターハイ出場、四国大会でも初優勝ができました。当時の選抜は西日本だけの大会で、第一回と数えられるのは面映い感じです。久山ロイヤルＴＣ（福岡）が会場でした。

四月に帰高して高見のコートを訪ねました。沖監督・中岡君は遠征中でしたが、白石主将はじめ選手たちに会って、県体に向けた激励ができました。何だか古いバトンを渡せた気がしてほっとしました。全国のレベルを体感した選手たちが、どんどん成長して、文武両道を極めてくれると確信しました。





筆山会

馬田　宏（三七回）

穏やかな陽射しの一月九日正午、いつもの新日鐵住金代々木倶楽部での新年会に、一年前と同じ約七〇名が参加し、幹事の前田憲一さん（三七回）中島宏さん（三八回）両氏による名司会に乗って三時間余の新春の集いを楽しんだ。



◆集ふ同袍意気強し！

先ず浅井伴泰筆山会々長（三十回）より会長として初めてのご挨拶、国内外の状況は波乱含みの年明けではあるが明るい話題がある、選抜に出られる可能性が、去年の秋頃からの新しい消費税率位から、今や内閣支持率並に上がってきたので一月二九日の出場校の発表に期待しようと述べられ、会場に三年前の興奮が蘇ってきた。次いで森郁夫同窓会関東支部長（四一回）の挨拶、この会は三七回と三八回に乗っ取られそう（註・三七回は十四名、三八回は九名で合計二三名。全体の三分の一近くになる）他の学年の参加増が望まれる一方で女性の参加が増えてきたのは喜ばしい（註・十五名）と述べた後乾杯の音頭を取り、宴が華やかに開幕した。

暫し歓談の後、各種活動の紹介タイム。例年の活動報告に加えて沢村武彰さん（三八回）が昨年発足した写真同好会「土佐高写楽塾」の活動報告を、更に吉野保徳さん（三一回）が昨年三一回有志により結成された「桂浜水族館応援団」をよさこい節の熱唱も交えて紹介し賛助を募った。因みに、現水族館々長は永国雅彦さん（三一回）の由。桂浜へ行ったら水族館へも行こう！



続く飛び入り参加型の自由スピーチの時間では北村總一郎さん（二九回、劇団昴）の公演を濱田知佐さん（五六回、ご存じシニア・ソムリエ）が紹介したり、野球部ＯＢの萩野友康さん（四四回・高二の時にエースの四番で甲子園出場、高校・大学・社会人の全てで全日本メンバーに選ばれた剛の者）が甲子園行きを確信して早速カンパを呼びかけたり、更には岩井千尋さん（四二回、青山学院の教授にしてプロ並みのトランペッター）吹奏の流麗たるホーギー・カーマイケル作曲の「スターダスト」が一堂に響き渡り、宴はいやが上にも盛り上がった。



最終章は濱崎洸一さん（三二回）による中締めと、沢村カメラマン（三八回）による全員及び学年別の記念写真撮影の後校歌の斉唱、皆で肩を組み、高田谷洋さん（三八回）や彼を伴う美声の吉本恵子さん（三七回）と池田勲夫さん（三八回）のリードで甲子園のリハーサルをして締め括った。

今回は土佐高の女子学生第一号の青嶋武子さん（二八回）が娘さんと一緒に初参加、大先輩方の参加が増えることは喜ばしい限りである。他方、若い卒業生の数も徐々に増えてきているようである。流石は土佐高のＯＢ・ＯＧ正に多士済々の活躍ぶりに心地よい刺激を貰い大いに意気が強くなったと感じた。早くも来年の会が楽しみである。

一般社団法人
土佐婚倶楽部®

婚活のお悩みを心を込めてサポート致します
年に数回、合コン等やってます！詳細はＨＰで

代表理事・東京相談室長　織田祐輔（45回生）
顧問弁護士　浦田理有（76回生）
顧問　岩松潤二（45回生）

URL http://tosakonclub.com/
東京相談室　042-521-2020
〒190-0012　東京都立川市曙町1-12-19 吉田ビル401

江戸百景（九）猿若町芝居



（上）江戸切絵図＜尾張屋清七版（嘉永頃-1850頃）＞幕府は、浅草寺の東北方にあった丹波園部藩小出家の下屋敷を収公し、約一万坪の敷地に江戸三座を移転させた。この地は初代猿若勘三郎にちなんで猿若町と名付けられた。



（上）歌川廣重「東都名所」より「芝居町繁栄之図」（天保末年-1844頃）。猿若町の通りを南から描いている。左側、木戸の上に櫓が上がっているのが芝居小屋で、手前から中村座、市村座、森田座（河原崎座）の三座が並ぶ。



（上）上図と同じ場所を同じ方向から筆者が撮影（浅草六丁目付近）。今は小さなビル群の谷間になっている。芝居小道具を作る会社の看板が出ているビルがあるのが、わずかにかつての芝居町の面影をとどめている。

俗に江戸の娯楽は男は遊郭、女は芝居見物、と言われたものだが、寛永期（一六二四～一六四四）の初代猿若勘三郎に端を発する歌舞伎芝居は、時代が下るにつれて盛んになり、江戸文化の爛熟とともに文化文政期に最盛期を迎えた。その後、天保の改革により浅草猿若町に移され、幕末から明治へと続いた。幕末の三十年間は公許の芝居小屋のある場所は猿若町に限定されていた。即ち、中村座、市村座、森田座（河原崎座）の江戸三座（猿若三座）がそれである（猿若町には他に人形芝居の結城座と薩摩座があった）。天保十二年（一八四二）以前は、中村座は堺町（日本橋）、市村座はすぐ近くの葺屋町、河原崎座（森田座）は木挽町（銀座）にあったが、水野忠邦の天保の改革で、町人の贅沢禁止、風紀取締りの一環として、江戸三座は浅草の奥山（浅草寺の裏手一帯）の方面である猿若町に移転させられ、ここ以外での常設の芝居小屋は禁止された。天保の改革は、庶民のあらゆる娯楽に掣肘を加え、特に歌舞伎に対しては、希代の名優と言われた七世市川團十郎を奢侈を理由に江戸所払いにしたり、役者の交際範囲や外出時の服装まで限定するなど、弾圧に近い統制を行った。

江戸日本橋という都会から浅草田圃の近くに移転させられた芝居小屋は、当初は人出も少なく寂びれていたが、水野忠邦が失脚して天保の改革が頓挫すると、芝居好きの江戸人の足が段々に浅草に向き始め、天保の改革後の世相の退廃も相まって、再び庶民の娯楽の王者として繁栄するようになった。浅草寺参詣を兼ねた芝居見物客が連日この地に足を運ぶようになり、幕末の猿若町は、この地から西北方すぐのところにある新吉原と斜めに呼応して華やかな鳴物気分を漂わしていた。

猿若町時代の歌舞伎役者と狂言作者

猿若町時代の主な役者としては、四世市川小團次、八世市川團十郎、三世澤村田之助、十三世市村羽左衛門（後の五世尾上菊五郎）等がいた。天保以後は世の退廃とともに歌舞伎演目も白波物のような生世話物が多くなった。狂言作者として猿若町時代に最も活躍した二世河竹新七（河竹黙阿弥）と組んで、「三人吉左」や「村井長庵」の人気狂言をやった四世市川小團次がもっとも代表的な役者と言えるだろう。また黙阿弥の「弁天小僧」は五世尾上菊五郎が初役だった。この時代の狂言作者は他に「切られ与三」や「佐倉義民伝」を書いた三世瀬川如皐もいた。「切られ与三」は八世市川團十郎が初役だった。

江戸時代の芝居小屋

幕末に楽屋トンビだった老人が大正時代に新聞記者に語り残した話がある。猿若町の芝居といっても、見世物小屋同然の粗普請で、屋根こそあるが天井は荒縄で縛った葦簀張りであった。昼でも暗いので舞台は蝋燭をつけ、役者の登場には釣り竿のような面明りをふりたてて役者の顔を照らした。小道具一切、実物ということはなく、箪笥でも長持でも、全て張り子であった。今（大正）の歌舞伎座などは電気ばかり明るくしてちっとも余韻がありゃしない。役者の声色が、役者の口から出て一二尺で闇に消えるをもって、大いに余韻に富んでいた。と語っている。

江戸時代の芝居見物

江戸の芝居見物は大層なものだ。芝居興行は夜は禁止されていたので、朝の蓋明けがむやみに早く、見物の大部分は、前の晩から芝居茶屋に泊まり込んだ。

幕末にある旗本の奥方が猿若町の芝居を見に行った話が残っているが、武家屋敷の多い番町を午前三時か四時に出て、ぶらぶら歩いて浅草猿若町に行き、まずは芝居茶屋に入り、朝飯を済ませてから芝居小屋に入る。夕方、芝居が打ち出してからまた茶屋にて休み、提灯を持った若い衆に雷門まで送られ、広小路から下谷、神田と過ぎて番町へ帰ると午前二時頃、草木も眠る丑満時の頃になるのだから、奥方は疲れ果てた。「前日は芝居見物の支度、翌日は疲れて何も出来ぬ。三日がかりの芝居見物だ」と語っていたそうだ。

猿若町芝居町の終焉

明治五年（一八七三）になると森田座が新富町に移り、他の二座も明治二十五年までに鳥越町、下谷二長町へと移って、猿若町は芝居町としての役目を終えてしまった。猿若町の全盛時代は幕末のわずか三十年ほどであった。しかし、歌舞伎芝居そのものはこれ以後も大いに盛況となってゆく。

（四一回　西岡恒憙）



（上）歌川廣重「名所江戸百景」より「猿わか町よるの景」（安政四年頃-1857年頃）。前掲図より十年以上後の猿若町を、前図と逆方向の北から描いている。夜の猿若町だから、芝居が打ち出した後、芝居茶屋の若い衆に送られて三々五々と家路につく人々だろうか。

広井先生のこと

獨協中学・高等学校　国語科教師
坂東広明（六十回）

「スルッどい！」

広井先生といってすぐ頭に浮かんでくるのは、この言葉である。先生は授業中、よく質問をされた。その質問に良い答えをすると、「スルッどい！」と言ってもらえるのだ。この一言をもらうために、僕たち生徒は競ってそれぞれの考えをよく発言したものだった。

僕たち六十回生と先生は、確か同じ年に「入学」したのではなかったかと記憶している。そして中学一年、二年と授業を受け持っていただいた。ご本の中で先生がお書きになっていることに基づけば、先生が国語教師として何を教えたら良いかと悪戦苦闘していた時期に当たる。しかし、その雑談だらけの破天荒な授業が、僕たちにはたまらない時間だった。何が起こるか分からないワクワク感が、先生の授業にはあった。そうした先生との出会いがなければ、僕が中学・高校の国語教師を目指すこともなかったであろう。

国語の教員志望という事もあり、卒業後も何度か先生を訪ねたことがある。そのとき先生から「国語の科学的授業を研究、実践している」という話を伺い、「ああ、先生も普通の授業をする普通の先生になってしまったのか…」と一抹の寂しさを感じていたのだが、今回この本を読んで、そのときの僕の感想が誤解にすぎなかったことがはっきりしてうれしかった。先生は相変わらずスリルとサスペンスに満ちた授業で生徒をワクワクさせてくれる、特別な先生だった。

「スルッどい！」

久しぶりにまた先生の授業を受けてみたいと、強く思った。

「読みのスリルとサスペンス ～深層読みで名作に迫る」（南の風社）

高知では母校の国語教諭、広井護先生（四八回）の著書が一月の発売以来じわじわ人気を広げ、好調な売れ行きを続けている。

「国語という教科、特に現代文の読解をどうとらえ、どう整理すれば合理的理解にたどりつけるかという筋道を、私の経験を織り交ぜつつ紹介していきたい」のが執筆の動機。

文章に隠された真実に近づき、答えを追求。「スリルとサスペンス」で「読み」の魅力に引き込まれること必至の一冊だ。

A5判二五二ページ、一七二八円（税込）。取り扱いは南の風社のネット通販と金高堂書店のみ。



二九回生・北村総一朗さんの東京公演「街と飛行船」

二〇一六年一月九日（土）
東京芸術劇場シアターウェスト

北村総一朗先輩（二九回生）出演の舞台「街と飛行船」を、先輩・後輩総勢十名近くで観劇してきました。



北村先輩は、皆さんもご存知の通り、テレビドラマ「踊る大捜査線」の署長役で世に名を馳せた俳優さんです。御年八十歳。実は、今回は、十年ぶりの舞台出演。三年前に前立腺がんのため舞台を降板して以来の、復帰舞台でもありました。

ストーリーは実に奥深く、船も汽車も飛行機も来ない隔絶された街に、突然飛行船が現れ、街の人々は不安を抱えながら暮らしていく。核弾頭にも見える飛行船は何を意味するのか…。北村先輩は、飛行船に立ち向かう市長の役でした。

魅力的なストーリーに加え、何よりも、北村先輩の味のある演技と、存在感に、目を奪われました。

土佐の先輩が、このような分野でご活躍されていることを心から誇りに思いますし、今後も先輩の舞台を拝見させていただきたいですね。



宮崎晶子（六七回）

合田佐和子さん（三四回）を悼んで

寺山修司や唐十郎の舞台美術やポスターを手がけた合田佐和子さん（七五歳）が二月十九日、鎌倉市にて心不全で亡くなられました。

朝日新聞で連載された中上健次の小説「軽蔑」（一九九一年）で毎回『目』だけの挿絵を描き、その幻想的な作風は話題になりました。ご冥福をお祈りいたします。





追憶・合田佐和子さん
吉川順三（三四回）

朝日の連載「軽蔑」の合田佐和子さんの挿絵には魅了された。各回を「目」だけで描き通したユニークな発想、鋭い感性での心象表現――小説よりも挿絵に惹かれて、回を追うごとに土佐高時代の彼女を思ったものだ。

高校では新聞部で一緒だった。彼女は当時から異才の部員だった。

たとえば紙面レイアウト。もちろんコンピュータ編集などは夢想もしない時代だったから記事の長さ、見出しや写真の大きさを計算、物差しを使って切貼りするなど、紙面の割り付けに四苦八苦していた。

ところが彼女が黙想のあと目を開いて筆を持つと、たちどころに細密な絵コンテが現れ、微調整するだけで紙面が出来上がった。彼女の才能に助けられて、ずいぶん楽をしたが、彼女はいつもクールな目で笑っていた記憶がある。

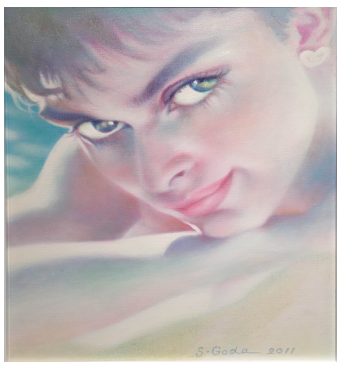


新聞の発行は年間でもせいぜい三回。編集に追われるよりも部室に集まって議論や雑談をして過ごすことが多かった。才気かん発、そこでの彼女の目は生き生きと輝いていた。頭の回転は速く、切り口はシャープだった。いささか毒のこもった皮肉も得意だった。私もしばしばきつい毒舌の的になったが、悪印象はなかった。そんな時に彼女が見せる明るく輝く目にドギマギしたものだ。

清少納言にあこがれ、コクトーの詩を論じ、部室での雑談にあきたら音楽室でバイオリンに興じていた彼女が美大へ進学したのには驚いたが、紙面製作で見せた精密なデザインを思い、すこし納得した。

高校卒業後、彼女に会ったのはわずか二回だけだった。

一回目は高松駅を出発する列車で二人の幼女を連れて座席を探す彼女と偶然出くわした。幼女の面倒を見る彼女は優しい母の目だった。また短い会話でエジプトや舞台美術を語ったが、彼女の目はあの新聞部時代と同じだった。

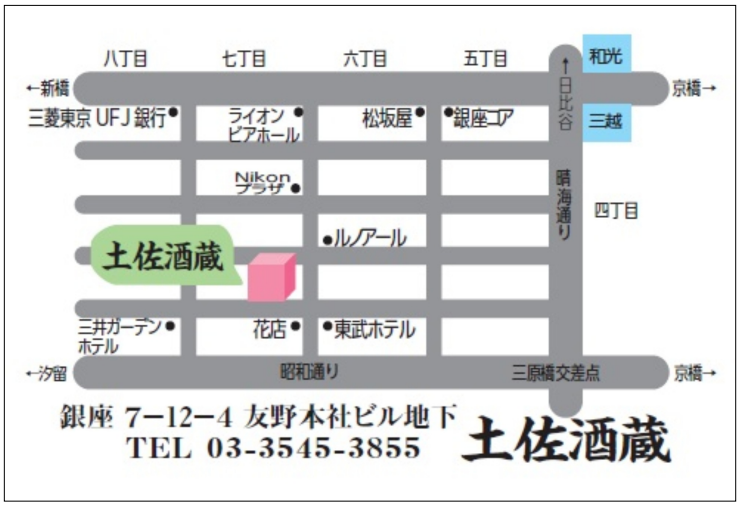


次は毎年東京で開く三四回生の集い。古希を迎え、はじめての出席だという彼女も静かに座っていた。彼女の目はなぜか終始、みんなから距離をおいて遠くを眺めていた。厳しい世界で妥協を許さず独特の作品を生み出し続けた彼女には、他愛なく和み合う同級生が異星人のように映っていたかもしれない。

散会後にお茶に誘おうとしたが彼女の姿は消えていた。

そして彼女は本当にいなくなった。――合掌





鍋島高明（30回）
「相場の世界　昔と今と」
<2016.3 ¥1,620米穀新聞社>



大橋一章（36回生）
「東大寺 ： 美術史研究のあゆみ」<2016.1 ¥2,700 里文出版>

岡部直明（40回生）
「ドルへの挑戦 ： Ｇゼロ時代の通貨興亡」
<2016.7 ¥1,944 日本経済新聞社>



黒鉄ヒロシ（41回生）
「刀譚剣記」
<2015.12 ¥1,512 PHP研究所>

高山宏（42回生）
「道化と笏杖(翻訳)」
<2016. 1 ¥6,912 白水社>

矢野龍彦（46回生）
「すごい!ナンバ歩き：「大股で、腕を振って、元気よく」はおやめなさい!」
<2016.5 ¥1,404 河出書房新社>



村木厚子（49回生）
「女性官僚という生き方」
<2015.12 ¥1,944 岩波書店>



門脇護（53回生）
（ペンネーム　門田隆将）
「あの一瞬　アスリートが奇跡を起こす「時」」
<2016.3 ¥950 KADOKAWA>



英保未来（54回生）
（ペンネーム　大森望 ）
「50代からのアイドル入門」
<2016.2 ¥1,620 本の雑誌社>

川村昌嗣（54回生）
「医師がすすめる48歳からの腹凹（はらぺこ）ウォーキングダイエット」
<2015.11 ¥1,188 毎日新聞出版>



森岡浩（55回生）
「知っておきたい家紋と名字」
<2016.5 ¥950 宝島社>



廣瀬裕子（60回生）
（ペンネーム　高遠裕子）
「スタンフォード大学 夢をかなえる集中講義(翻訳)」
<2016.1 ¥1,620 CCCメディアハウス>

私の一冊『穴の本』

高山宏（四二回生）

絵本はさながらアート作品だと思う。絵と言葉が紡ぐ世界観。なかなかに奥が深い。

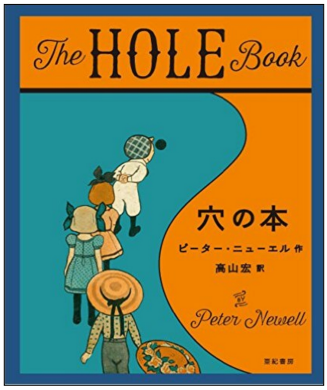
本書は、子どもたちには少々刺激が強そうだが。書かれたのは一九〇八年。世界が不穏な時代へと突き進んでいる時代。

男の子が偶然にも放った一発の銃弾が、さまざまな人々の生活に穴を開けていく。

リズミカルな翻訳の文体が、本書のブラックユーモアをさらに引き立てている。また、中央に空いた穴のしかけは、現代のインタラクティブアートに通じる。

忙しい日々に、本書で手軽にアートに触れてみては、いかがだろうか。感じるものがあるはずだ。

六七回生　竹村佳奈



2016.4 ¥1,728
亜紀書房